



2024年7月12日。震災後初めて珠洲に行ってきた。まず金沢～珠洲までを繋ぐ主要道路である「のと里山海道」が、まだ完全に復旧していないことに驚く。もう発災から半年も経ってるのに。珠洲方面は通れたが、金沢方面がまだ一部通行止め状態。しかしまもなく（数日以内に）復旧見込みらしい。

珠洲は街全体がぼろぼろ。ほぼ全ての建物で瓦が落ちていて、あとは一階がまるごと崩れて2階部分が地面に落ちていたり、建物の途中からちぎられたように壊れた平家や、屋根が陥没して真ん中が崩れている家、90度倒れて屋根全体が丸見えになっている長屋など。地域によっては東日本大震災の直後のような、瓦礫の山と化した家たちが道の両脇に延々と並んでいるようなところもある（蛸島や宝立など）。

「道づれ」という、めちゃくちゃ量が多い定食が食べられるレストランが入っている「シ～サイド」は津波を被って閉業していた。その付近の駐車場はアスファルトの地面が海に向かって傾き、一部は海水が流れ込んでいた。

道路だけは瓦礫が片付けられていて（というか脇に寄せられていて）、車はわりと通れるが、ガラスや木片などは道端に転がっているのでパンクなどには注意が必要。飯田の市役所前のあたりは一見派手に壊れていないが、電柱や塀や家がどれもほうぼうに傾いているせいで、時空が歪んで見えるというか、街という人工物を成り立たせている「直角のバランス」が失われたような、異様な光景になっている。

そしてほとんどの家が崩れたまま放置されている。一番驚いたのが街の静けさ。こわいくらい静かだった。街が呆然としているようだった。これだけ撤去するべきものが山積みになっているのに、解体業者はほとんどみあたらない。半日見て回って、両手で数えられるくらいしか見なかった。珠洲の友人曰く「これでもここ一ヶ月ですごく増えた方だ」と言っていた。

国力という言葉はあまり使いたくないが、そういったものの衰退を感じる。なんというか、全体にあきらめムードが漂っている。「大怪我をした老人が、呆然と座って景色を眺めている」イメージが浮かんだ。小学校などでいまだに避難生活を送っている人も大勢いるという。

友人は仮設住宅が当たったから仮設に住めているけど、「ここでは生活を整えていこうという気になれない」と言っていた。とはいえ「自分たちは金沢に二次避難先があったし、仮設も当たったからいいほうだ。二次避難もできなくて、やむを得ず崩れかけの家に住んでいる人もたくさんいる。70歳のおばあちゃんがいるような家族全員で、50日以上も車中泊生活してた人たちもいる」と言っていた。「自分はまだいいほうだ」というセリフを、この街のあちこちで色々な人が口にしているのだろう。仮設住宅ではみんな、刑務所みたいに静かに、周りに迷惑をかけないように生活している、という。

建物の公費解体を申請するには、「半壊以上」じゃないとダメらしい。「半壊」に満たない場合は、行政からの補助はなにもないに等しいという。そしてその損壊具合は建物全体のパーセンテージで判断する。一軒一軒の建物が大きい珠洲という街においては、この判断方法で色々な問題がおこる。例えばごく一部を住居として使い、のこりを倉庫として使っているような建物があるとして、大切な住居の部分が壊れて住めなくなってしまうと、残りの倉庫部分が無事なら「一部損壊」扱いになってしまい、公費解体は申請できない。逆にもう何十年も使っていないような、ほとんど崩れかけていた建物が地震で全壊したような場合、その持ち主は行政からの補助を受け取ることができる。地震の被害もひどいが、解体撤去すら全然進んでいない現状や、こういった行政のシステムが全然うまくまわっていないことがなによりショック。これだけ地震が多い国なのに、震災のたびに毎回アタフタしている印象。

この静けさの中で半年以上も避難生活を強いられ、半永久的に住むことができる坂茂設計の木造仮設住宅が「資材が高騰してる」という理由で建設が中止にされてしまうような生活を送る中で、大阪万博会場で工事中のでかい輪っかの写真なんか見たら絶望するだろう。私たちは見捨てられたのだと思うだろう。万博の建設と、能登の復旧資材や人材の確保は全然別の問題なので「こっちで使ってるからあっちでは使えない」みたいなことは起こっていない、といくら説明したところで、「わたしたちは後回しにされている」「わたしたちは見捨てられた」と感じるだろう。実態はどうあれ、そう感じられる「メッセージ」は出されてしまっている。

さらに金が絡んだときの人間の負の面もいくつか聞いた。まず驚いたのは崩れた家の瓦礫がとなりの家を傷つけたという理由で損害賠償を請求する人がいるという。

また借家の大家さんから「住んでなかったことにされかけた」人もいる。その借家に大家の祖母が住んでいたことにすれば、二世帯分の補助金がもらえるからである。当然それは嫌なので断ったけど、「はやくでてけ」と言われ、敷金も返されなかったという。断水時に住民同士が水を奪い合って揉めたという話も聞いた。こういう話は本当にきつい。せめて災害時くらいはユートピアであってほしい。以前お世話になった道の駅「すずなり」も、従業員が大勢やめてしまって、かつての活気は失われてしまったようだ。

しかし暗い印象ばかりではない。珠洲屈指の名書店「いろは書店」は、建物は倒壊してしまったが、斜め向かいのタクシー会社の土間を使って営業を再開していた。手作りの棚や滑車をつかった木製のドアなどは見ているだけで元気がでた。「講談社」や「集英社」など出版社名を印刷した紙を自分でラミネートして棚の上に貼っているのを眺めていると涙が出てきた。ものづくりの初心にかえるというか、「つくる」という行為が持っている、絶対的に前向きなパワーを思い出させられた。

いろは書店店主のブログには、業者の方はとても慎重に仕事をしてくれていて、使えるものは分類してくれている。とても助かる。一步一步の前進。仮設住宅もずいぶん完成した。などなど、前向きな言葉がたくさん書かれている。私たちが軽く立ち話をした業者の方も、とても親切だった。「ご支援ありがとうございます」と書かれた手書きの看板が道沿いにたくさん並んでいて私も元気をもらったし。宿泊した志賀町の人からは「能登を気にかけてくれてありがとうございます」と何度もお礼を言われた。皆なんとか前向き、日々を暮らしている。

「一部やっかいな人はいるけど、基本的に能登の人はみんな優しい」と友人は言っていた。私も自分のプロジェクト「移住を生活する」で能登半島を歩いたとき、「やさしい場所」だと思った。半島全体が一つの家庭のような雰囲気だった。なんでこんなに優しい人ばかりなのか、悪い人に騙されちゃんじゃないかと、心配になるくらいだった。日本で最も古くから人が住んでいる地域のひとつで、かつ、もっとも人口が多い時代もあったという、すごく綺麗な、大切な街。



もうひとつ。友人の旧住居の向かいに建っていた、友人いわく「築三百年の」立派な家が、地震で完全に倒壊してしまったのだけど、そこに住んでいた70歳と90歳のおばあちゃんは無事だった。地震の瞬間、たまたま崩れずに持ちこたえたところに居たのが幸いして、奇跡的に助かったという。家が守ったんじゃないか、と思った。最後の力を振りしぼって、住人をかばったような、そんな崩れ方をしていた。手をあてて、よくがんばった、と伝えた。









